

2022年2月1日

自己認識の難しさ

公益財団法人 国際通貨研究所
理事長 渡辺 博史

こういう標題を挙げてみたが、醒めた方々からは、「自分が何であるかなんて、所詮死ぬまで分からないさ」と言われてしまいそうだが、暫くお付き合いを。

まあ、あまり哲学的なことに言及しようとしても能力的に無理が有るので、ここでは、規模感、距離感といったやや計数的なことにしぼって話を進めよう。

一番身近に実感しているのは、実は人間の「厚み」である。少し前までは、中年のオジサンが立っているときの前後方向の厚みは標準的に言えば概ね 50 センチくらいのものであろう。手にカバンをぶら下げても、そのカバンの横幅も普通は 50 センチ程度であり、またガラケー的な携帯電話を使用していても、使用機会がしょっちゅう有るわけでもないから、利き手が前に突出し続けるでも無い。したがって、そのオジサンの占めている前後の幅は、その身体の「厚み」である 50 センチである。人間を前後に並ばせる際の間隔はそれを基準に定められていた。

しかし、最近の状況は大きく変化している。まずは、良い年をしたオジサン（筆者を含む）がリュックサック、バックパックを背負うようになってきているが、中身が大して入っていないなくても、これにより 20~30 センチほど後方に「太っている」ことになるのである。また、ガラケーがスマホに変わった瞬間、立ち止まっているときも、「この時にはお止めなさい」と警告されている歩行時においても、スマホ画面が目の前に来るように、利き手が前方にほぼ常時突出している。この前方突出幅も含めれば、今や一人のオジサンの「疑似身体」の厚みは1メートルになんなんとしている。

したがって、例えば 10 名を並ばせようとした場合には、これまでよりは遥かに長い距離が必要となって来る。これは単にスペース不足になるかどうかという問題が起こるだけであるが、やや危険をもたらしているのが、鉄道構内のプラットフォームである。ここから前に出ないように、という趣旨で黄色い線が線路に平行にひかれているが、プラットフォーム端から線までのスペースは、往々にして、プラットフォームを横移動する乗客の歩行可能帯にもなっている。そういう目で見てみると、今は、列の最先端にいる人間が伸ばしたスマホ保持の利き手が、そのスペースの幅の 20~30 センチを「占拠」し、その結果、歩行者は線路側に寄って、あるいは身体を傾けながら、歩行するように

なっている。それが原因での車両との接触が起こっているのかどうか、といった発表は今のところ（多分）無いが、見ていて若干はらはらする。

本来なら、列の最先端に位置する人は、そのスマホ分だけ後ろに下がって立つとか、スマホの手を伸ばす先は前方では無く、横方向にするとといったことを示唆することを考えるべきだと思うが、今のところ、そのような提案に接したことはない。

また、より些細なことであるが、フード付きのコートを着ているさほど長身ではない若者がそのフードを頭にかぶらず、後ろに垂らしたままに、電車の座席の端の支持ポール部に寄り掛かると、そのフードがそのポール部に一番近いところに座っている乗客の頭、顔を撫でまわすようになっている。まあ、それが原因で口論が起こったという現場には遭遇していないが、口頭で注意を告げている例はあった。

また、推奨される乗客マナーにしたがって、リュックサックを背中に背負わず前に提げるとい模範的な乗客のリュックサックからぶら下がった長短様々なストラップ、紐が前に座っている乗客の顔面を襲うこともある。

このように、自ら意識しないままに自分の規模、「厚み」が増していることを認識しえない、自覚できない、ということが、これ以外の面でも起こっているのではないだろうか。

冬季の「着膨れ」は、かなりの方が認識されているが、これは個々人の行動変化を期待するものではない（「薄着にして下さい」、「乗車前にコートは脱いで頭の上に」とは言わないだろう）。しかし、上記の些細な3事象は、実は個々人のより適切な行動変化を期待しうるものである。

新たに取り入れた仕組み、スキームが本来の狙いでは無い部分で、いわば副次的にどのような効果をもたらすかは、なかなか把握しにくい。計数把握でも、例えばネットからグロスに変わった時にその量的管理のメルクマールは変るし、一時点計測から平残計測に変わった場合に取り上げるべきインパクトの差も大きくなる。資金のサイズが意図的かどうかにかかわらず膨らんだだけでも、不測の状況をもたらすこともありうる。

このような方式変更、仕組みの採用が自らの自覚的選択であれば、それなりの対応は準備されていようが、国内外の当局の制定規則も含めて周囲の外的変化がもたらした場合には、認識が遅れることがある。また、基本的にリニア換算で将来予測なりが出来ていたものが、いつの間にか客体としての状況が変わってエクスポネンシャル変移な世界に移行している場合も出て来る。一つずつ見れば大きな動きにつながるとは到底思えないものが、実はかなりの変容をもたらしていることが多いのである。

そして一番見落とし易いのは、別の目的で採用、導入したものが、全く思いもよらないところで、効果をもってしまうときである。このような場合には、発現した効果の原因分析というか探査活動が相当遅れる可能性があるし、採用、導入の担当者は主たる目的に向けての思考が頭の中を占めているので、起こってしまった別の効果の分析になか

なか取り掛かれないということまで起こりうる。

社会事象の変化、新規に利用する素材・手法のもたらす副次的効果、そしてルールの改訂に伴う行動パターンの変化といったものの把握、認識に常時神経を使うというのはただでさえ負荷の高い仕事を更に負担感の強いものにしてしまう。しかし、これらの変化に速やかに対応することは無用な摩擦トラブルの発生を抑制しコストを低下させるだけでなく、新しいルール創りに先鞭をつけるポジションを獲ることにもつながりうる。

(IIMA メールマガジンへの寄稿)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2022 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: Nihon Life Nihonbashi Bldg., 8F 2-13-12, Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo 103-0027, Japan

Telephone: 81-3-3510-0882

〒103-0027 東京都中央区日本橋 2-13-12 日本生命日本橋ビル 8 階

電話 : 03-3510-0882 (代)

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>